

現代歌集

68

日本文学全集



現代歌集

日本文学全集 68

日本文学全集 68 現代歌集

昭和四十五年十一月一日発行

著者 土岐善麿

発行者 竹之内静雄

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（代表）
振替東京四一二三

本文整版 株式会社精興社
本文印刷 株式会社精興社
製本 株式会社鈴木製本所

現代歌集 目次

與謝野晶子

みだれ髪……………五

尾上柴舟

銀鈴……………七

窪田空穂

まひる野……………七

尾山篤二郎

明る妙……………三

木下利玄

紅玉……………六

中村憲吉

しがらみ……………二九

渡邊順三

貧乏の歌……………一五

會津八一

南京新唱……………一三

古泉千樫

川のほとり……………一五

太田水穂

冬菜……………二六

プロレタリア短歌集

(一九二九年メーデー記念)抄……………二六

前田夕暮

水源地帯……………二六

土屋文明

木俣修

山谷集……………三

高志……………四〇一

新短歌

吉野秀雄

(一九三八年)抄……………三七

寒蟬集……………四四四

土岐善麿

岡麓

六月……………六一

雪間草……………四七〇

年譜……………四八

解説……………久保田正文 四五

現代
歌
集

みだれ髪

この書の体裁は悉く藤島武二先生の意匠に成れり 表紙画みだれ髪
の輪廓は恋愛の矢のハートを射たるにて矢の根より吹き出でたる
花は詩を意味せるなり

臙脂紫

夜の帳にささめき尽きし星の今を下界の人の髪のはつれよ
歌にきけな誰れ野の花に紅き否むおもむきあるかな春罪も
つ子

髪五尺ときなば水にやはらかき少女ごころは秘めて放たじ
血ぞもゆるかさむひと夜の夢のやど春を行く人神おとしめ
な

與謝野晶子

椿それも梅もさなりき白かりきわが罪問はぬ色桃に見る
その子二十櫛にながるる黒髪のおごりの春のうつくしきか
な

堂の鐘のひくきゆふべを前髪まへかみの桃のつぼみに経たまへ君
紫にもみうらにほふみだれ簀はじをかくしわづらふ宵の春の神
臙脂色は誰にかたらむ血のゆらぎ春のおもひのさかりの命
紫の濃き虹説きしさかづきに映る春の子眉毛まゆげかばそき
紺青を絹にわが泣く春の暮やまぶきがさね友歌ねびぬ
まゐる酒に灯あかき宵を歌たまへ女はらから牡丹に名なき

海棠にえうなくときし紅すてて夕雨みやる瞳よたゆき

水にねし嵯峨の大堰のひと夜神紹蚊帳の裾の歌ひめたまへ

春の国恋の御国のあさばらけしるきは髪か梅花のあぶら

今はゆかむさらばと云ひし夜の神の御裾さはりてわが髪ぬれぬ

細きわがうなじにあまる御手のべてささへたまへな帰る夜の神

清水へ祇園をよぎる桜月夜こよひ逢ふ人みなうつくしき

秋の神の御衣より曳く白き虹ものおもふ子の額に消えぬ

経はにがし春のゆふべを奥の院の二十五菩薩歌うけたまへ

山ごもりかくてあれなみをしへよ紅つくるころ桃の花さかむ

とき髪に室むつまじの百合のかをり消えをあやぶむ夜の淡紅色よ

雲ぞ青き来し夏姫が朝の髪うつくしいかな水に流るる

夜の神の朝のり帰る羊とらへちさき枕のしたにかくさむ

みぎはくる牛かひ男歌あれな秋のみづうみあまりさびしき

やは肌のあつき血汐にふれも見でさびしからずや道を説く君

許したまへあらずばこそ今のわが身うすむらさきの酒うつくしき

わすれがたきとのみに趣味をみとめませ説かじ紫その秋の花

人かへさず暮れむの春の宵ごち小琴にもたす乱れ乱れ髪

たまくらに髪のとすぢきれし音を小琴と聞きし春の夜の夢

春雨にぬれて君こし草の門よおもはれ顔の海棠の夕

小草いひぬ『酔へる涙の色にさかむそれまで斯くて覚めざれな少女』

牧場いでて南にはしる水ながしさても緑の野にふさふ君

春よ老いな藤によりたる夜の舞殿まひだるならぶ子らよ束の間つひ老
いな

雨みゆるうき葉はしら蓮はす絵師の君に傘かさまゐらす三尺の船

御相みさういとどしたしみやすきなつかしき若葉わかば木立こだちの中の廬ろ遮しや
那仏

さて責むな高きのにのぼり君みずや紅あけの涙なみだの永劫えいこくのあと

春雨にゆふべの宮をまよひ出でし小羊こひつぎみ君をのろはしの我れ

ゆあみする泉の底の小百合さゆりばな花二十の夏をうつくしと見ぬ

みだれごこちまどひごこちぞ頻しきりなる百合ふむ神に乳ちちおほひ
あへず

くれなゐの薔薇ばらのかさねの唇くちばしに霊たまの香かのなき歌のせますな

旅のやど水に端居はしむの僧の君をいみじと泣きぬ夏の夜の月

春の夜の闇なの中くるあまき風しばしかの子が髪に吹かざれ

水に飢ゑて森をさまよふ小羊のそのまなざしに似たらずや
君

誰ぞ夕ゆふひがし生駒いこまの山の上のまよひの雲にこの子うらなへ

悔くいますすなおさへし袖に折れし劍つるぎつひの理想おもひの花に刺とげあら
じ

額ぬかごしに暁あけの月みる加茂川の浅水色あさういろのみだれ藻染もぞろよ

御袖みそでくくりかへりますすかの薄闇うすよみの欄干おぼし夏の加茂川の神

なほ許せ御国遠くば夜の御神みかみ紅盃べにざら船に送りまゐらせむ

狂ひの子われに焰ほのほの翅はねかるき百三十里あわただしの旅

今ここにかへりみすればわがなさけ闇をおそれぬめしひに
似たり

うつくしき命を惜しと神のいひぬ願ひのそれは果してし今

わかき小指こゆび胡粉ごふんをとくにまどひあり夕ぐれ寒き木蓮の花

ゆるされし朝よそほひのしばらくを君に歌へな山の鶯

ふしませとその間さがりし春の宵衣桁にかけし御袖かつぎ
ぬ

みだれ髪を京の島田にかへし朝ふしてゐませの君ゆりおこ
す

しのび足に君を追ひゆく薄月夜右のたもとの文がらおもき

紫に小草が上へ影おちぬ野の春かぜに髪けづる朝

絵日傘をかなたの岸の草になげわたる小川よ春の水ぬるき

しら壁へ歌ひとつ染めむねがひにて笠はあらざりき二百里
の旅

嵯峨の君を歌に仮せなの朝のすさびすねし鏡のわが夏姿

ふさひ知らぬ新婦かざすしら萩に今宵の神のそと片笑みし

ひと枝の野の梅をらば足りぬべしこれかりそめのかりそめ
の別れ

鶯は君が夢よともどきながら緑のとはりそとかかげ見る

紫の虹の滴り花におちて成りしかひなの夢うたがふな

ほととぎす嵯峨へは一里京へ三里水の清瀧夜の明けやすき

紫の理想の雲はちぎれ／＼仰ぐわが空それはた消えぬ

乳ぶきおさへ神秘のとばりそとけりぬここなる花の紅ぞ濃
き

神の背にひろきながめをねがはずや今かたかたの袖こむら
さき

とや心朝の小琴の四つの緒のひとつを永久に伸きりすてし

ひく袖に片笑もらす春ぞわかき朝のうしほの恋のたはぶれ

くれの春隣すむ画師うつくしき今朝山吹に声わかかりし

郷人にとなり邸のしら藤の花はとのみに問ひもかねたる

人にそひて櫓ささぐるこもり妻母なる君を御墓に泣きぬ

なにとなく君に待たるこちして出でし花野の夕月夜か
な

おばしまにおもひはてなき身をもたせ小萩をわたる秋の風
見る

ゆあみして泉を出でしわがはだにふるはつらき人の世の
きぬ

売りし琴にむつびの曲をのせしひびき逢魔がどきの黒百合
折れぬ

うすものの二尺のたもとすべりおちて螢ながるる夜風の青
き

恋ならぬねざめたたずむ野のひろさ名なし小川のうつくし
き夏

このおもひ何とならむのまどひもちしその昨日すらさびし
かりし我れ

おりたちてうつつなき身の牡丹見ぬそぞろや夜を蝶のねに
こし

その涙のごふゑにしは持たざりきさびしの水に見し二十日
月

水十里ゆふべの船をあだにやりて柳による子ぬかうつくし
き (をとめ)

旅の身の大河ひとつまどはむや徐かに日記の里の名けしぬ
(旅びと)

小傘とりて朝の水くみ我とこそ穂麦あをあを小雨ふる里

おとに立ちて小川をのぞく乳母が小窓小雨のなかに山吹の
ちる

恋か血か牡丹に尽きし春のおもひとのゐの宵のひとり歌な
き

長き歌を牡丹にあれの宵の殿妻となる身の我れぬけ出でし

春三月柱おかぬ琴に音たてぬふれしそぞろの宵の乱れ髪

いづこまで君は帰るとゆふべ野にわが袖ひきぬ翅ある童

ゆふぐれの戸に倚り君がうたふ歌『うき里去りて往きて帰
らじ』

さびしさに百二十里をそぞろ来ぬと云ふ人あらばあらば如

何ならむ

君が歌に袖かみし子を誰と知る浪速の宿は秋寒かりき

その日より魂にわかれし我れむくろ美しと見ば人にとぶらへ

今の我に歌のありやを問ひますな柱なき織絃これ二十五絃

神のさだめ命のひびき終の我世琴に斧うつ音ききたまへ

人ふたり無才の二字を歌に笑みぬ恋二万年ながき短き

蓮の花船

漕ぎかへる夕船おそき僧の君紅蓮や多きしら蓮や多き

あづまやに水のおときく藤の夕はづしますなのひきき枕よ

御袖ならず御髪のとけときこえたり七尺いづれしら藤の花

夏花のすがたは細きくれなるに真昼いきむの恋よこの子よ

肩おちて経にゆらぎのそぞろ髪をとめ有心者春の雲こき

とき髪を若枝にからむ風の西よ二尺に足らぬうつくしき虹

うながされて汀の闇に車おりぬほの紫の反橋の藤

われとなく梭の手とめし門の唄姉がゑまひの底はづかしき

ゆあがりのみじまひなりて姿見に笑みし昨日の無きにしも

あらず

人まへを袂すべりしきぬでまり知らずと云ひてかかへてに
げぬ

ひとつ篋にひひなをさめて蓋とちて何となき息桃にはばか
る

ほの見しは奈良のはづれの若葉宿うすまゆずみのなつかし
かりし

紅に名の知らぬ花さく野の小道いそぎたまふ小傘の一人

くだり船昨夜月かげに歌そめし御堂の壁も見えず見えずな
りぬ

師の君の目を病みませる庵の庭へうつしまゐらす白菊の花

文字はそく君が歌ひとつ染めつけぬ玉虫ひめし小宮の蓋に

ゆふぐれを籠へ鳥よぶいもうとの爪先ぬらす海棠の雨

ゆく春をえらびよしある絹袷衣ねびのよそめを一人に問ひ
ぬ

ぬしいはずとれなの筆の水の夕そよ墨足らぬ撫子がさね

母よびてあかつき問ひし君といはれそむくる片頬柳にふれ
ぬ

のろひ歌かきかさねたる反古とりて黒き胡蝶をおさへぬる
かな

額しろき聖よ見ずや夕ぐれを海棠に立つ春夢見姿

笛の音に法華経うつす手をとどめひそめし眉よまだうらわ
かき

白檀のけむりこなたへ絶えずあふるにくき扇をうばひぬる
かな

母なるが枕経よむかたはらのちひさき足をうつくしと見き

わが歌に腫のいろをうるませしその君去りて十日たちにけ
り

かたみぞと風なつかしむ小扇のかなめあやふくなりける
かな

春の川のりあひ舟のわかき子が昨夜の泊の唄ねたましき

泣かで急げやは手にはばき解くゑにしるにし持つ子の夕を
待たむ

燕なく朝をはばきの紐ぞゆるき柳かすむやその家のめぐり

小川われ村のはづれの柳かげに消えぬ姿を泣く子朝見し

鶯に朝寒からぬ京の山おち椿ふむ人むつまじき

道たま／＼蓮月が庵のあとに出でぬ梅に相行く西の京の山

君が前に李青蓮説くこの子ならずよき墨なきを梅にかこつ
な

あるときはねたしと見たる友の髪に香の煙のはひかかる
な

わが春の二十姿と打ぞ見ぬ底くれなるのうす色牡丹

春はただ盃にこそ注ぐべけれ智慧あり顔の木蓮や花

さはいへど君が昨日の恋がたりひだり枕の切なき夜半よ

人そぞろ宵の羽織の肩うらへかきしは歌か芙蓉といふ文字

琴の上に梅の実おつる宿の昼よちかき清水に歌ずする君

うたたねの君がかたへの旅づつみ恋の詩集の古きあたらしき

戸に倚りて菖蒲売る子がひたひ髪にかかる薄霧にはひある朝

五月雨もむかしに遠き山の庵通夜する人に卯の花いけぬ

四十八寺そのひと寺の鐘なりぬ今し江の北雨雲ひくき

人の子にかせしは罪かわがかひな白きは神になどゆづるべき

ふりかへり許したまへの袖だたみ闇くる風に春ときめきぬ

夕ふるはなさけの雨よ旅の君ちか道とはで宿とりたまへ

巖をはなれ谿をくだりて躑躅をりて都の絵師と水に別れぬ

春の日を恋に誰れ倚るしら壁ぞ憂きは旅の子藤たそがるる

油のあと島田のかたと今日知りし壁に李の花ちりかかる

うなじ手にひくきささやき藤の朝をよしなやこの子行くは旅の君

まどひなくて経ずする我と見たまふか下品の仏上品の仏

ながしつる四つの笹舟紅梅を載せしがことにおくれて往きぬ

奥の室のうらめづらしき初声に血のぼりし面まだ若き

人の歌をくちずさみつつ夕よる柱つめたき秋の雨かな

小百合さく小草がなかに君まてば野末にほひて虹あらはれぬ

かしこしといなみていひて我とこそその山坂を御手に倚ら

ざりし

鳥辺野は御親の御墓あるところ清水坂に歌はなかりき

御親まつる墓のしら梅中に白く熊笹小笹たそがれそめぬ

男きよし載するに僧のうらわかき月にくらしの蓮の花船

経にわかき僧のみこゑの片明り月の蓮船兄こぎかへる

浮葉きるとぬれし袂の紅のしづく蓮にそそきてなさけ教へむ

こころみにわかき唇ふれて見れば冷かなるよしら蓮の露

明くる夜の河はひろき嵯峨の欄きぬ水色の二人の夏よ

藻の花のしろきを摘むと山みづに文がら濡ぢぬうすものの袖

牛の子を木かげに立たせ絵にうつす君がゆかたに柿の花ちる

誰が筆に染めし扇ぞ去年までは白きをめでし君にやはあら

ぬ

おもざしの似たるにまたもまどひけりたはぶれますよ恋の神々

五月雨に築土くづれし鳥羽殿のいぬゐの池におもだかさきぬ

つばくらの羽にしたたる春雨をうけてなでむかわが朝寐髪

しら菊を折りてゑまひし朝すがた垣間みしつと人の書きこし

八つ口をむらさき緒もて我れとめじひかばあたへむ三尺の袖

春かぜに桜花ちる層塔のゆふべを鳩の羽に歌そめむ

憎からぬねたみもつ子とききし子の垣の山吹歌うて過ぎぬ

おばしまのその片袖ぞおもかりし鞍馬を西へ流れにし霞

ひとたびは神より更ににはひ高き朝をつつみし練の下裳

白百合

月の夜の蓮のおばしま君うつくしうら葉の御歌わすれはせ
ずよ

たけの髪をとめ二人に月うすき今宵しら運色まどはずや

荷葉なかば誰にゆるすの上の御句ぞ御袖片取るわかき師の
君

おもひおもふ今のところに分ち分かず君やしら萩われやし
ろ百合

いづれ君ふるさと遠き人の世ぞと御手はなちしは昨日の夕

三たりをば世にうらぶれしはらからとわれ先づ云ひぬ西の
京の宿

今宵まくら神にゆづらぬやは手なりたがはせまさし白百合
の夢

夢にせめてせめてと思ひその神に小百合の露の歌ささやき
ぬ

次のまのあま戸そとくるわれをよびて秋の夜いかに長き
じかき

友のあしのつめたかりきと旅の朝わかきわが師に心なくい
ひぬ

ひとまおきてをりをりもれし君がいきその夜しら梅だくと
夢みし

いはず聴かずただうなづきて別れけりその日は六日二人と
一人

もろ羽かはし掩ひしそれも甲斐なかりきうつくしの友西の
京の秋

星となりて逢はむそれまで思ひ出でな一つふすまに聞きし
秋の声

人の世に才秀でたるわが友の名の末かなし今日秋くれぬ

星の子のあまりによわし袂あげて魔にも鬼にも勝たむと云
へな

百合の花わざと魔の手に折らせおきて拾ひてだかむ神のこ